

日本学術会議と私

松田 一郎

2003年、私が第19期学術会議の会員に選ばれた頃は、日本学術会議に登録された各分野の学術学会からの推薦を受けた議員候補者を対象にして、そこから選挙で選出されるという方法がとられていました。私の場合は、日本人類遺伝学会からの推薦候補として、選出されました。第20期からは、選出方法が変わりましたが、そのことについての詳細は恐らく何方かが詳細に書いてくださるものと思います。

私の属していた部会の部会長は東京大学小児科学の名誉教授鴨下重彦先生でした。鴨下先生は、私と同じ小学校で、学年も一年違い、しかも同じ町内に住んでいましたし、医学部での専門分野も同じということで、学術会議のこともいろいろと教えていただきました。

部会は、医学、歯学、薬学に関係した各学会からの方々で構成されていまして、それまでは知る機会のなかった方々と知り合うことができ、私としては、視野を広くさせて頂く、貴重な経験をさせていただきました。特に、日本歯科大学の小林義典先生には、‘歯の交合と脳機能’の問題など、それまで私にとっては、全く未知の問題について教えていただき、まさに「目からうろこが落ちる」という経験でした。その後も、個人的に交流をさせていただき、深く感謝しています。学術会議の任期を終えた後に、歯学部のある北海道医療大学に赴任したときには、小林先生との交流で得た知識や人脈が、随分と、私の支えになりました。こうして思い出をつづってみますと、学術会議のメンバーの方々との個人的な交流で、話が終わってしまいそうですが、会員として、役立つ仕事も幾つかさせていただきました。その一つが国際医学団体協議会（Council of International Organization of Medical Science (WHO/UNESCO) 通称 CIOMS) での仕事でした。

日本人類遺伝学会は、初代の学会理事長の井上英二先生以来、CIOMSとの交流がありました。私は、2001年からは、このCIOMSには執行委員会委員のメンバーとして参加していましたが、2003年からは、日本学術会議選出のメンバーとして、参加することになりました。

たまたま、2003年から‘International Ethical Guidelines for Epidemiological Studies’の改定が始まり、私は最初からこの会議に関与することになりました。会議は全て、ジュネーブの世界保健機構(WHO)の会議室の中で行われました。ガイドライン作成委員会の議長は、Prof. Michel B Vallottonで、委員はアメリカ、フィンランド、イタリア、スイス、オランダ、日本などからの総勢12名で、会議は年に1~2回、トータルで6回開かれました。アジアからは私一人でした。会議では、私は遺伝子検査に関係する分野を担当しましたが、幸い1995年に、当時、日本人類遺伝学会の倫理審議委員会委員長だった私が中心になり、‘遺伝性疾患の遺伝子診断に関するガイドライン’を作成していただきましたので、CIOMSで与えられた仕事はやり甲斐のあるものでした。それに加えて、私にとって極めて貴重な経験となったのは、会議の進め方とその最終報告書を発刊するまでの全てのプロセスを体験できたことでした。最初、作業は‘Ethics and Epidemiology: International Guidelines’ (1990年)を基にして、それに改正を加えるという方向で始められましたが、途中から、通称‘グリーンブック’といわれて、各国で広く利用されている‘International Ethical Guidelines for Biomedical Research Involving Human Subject’ (2002年)を基に進めることがメンバーの一人から提案され、それが了承されて、各項ごとに議論が進められることにな

りました。方法はメンバーそれぞれが、手分けしていわゆる‘たたき台’をつくり、それについて論議するという方法がとられました。詳細は紙面の都合で省きますが、議論はさまざまな状況を想定して行われ、時にはかなり白熱することもありましたが、まとめられた原稿については、2回、インターネットを通じて、関連する各国の学会にパブリック・オピニオンを求め、寄せられたコメントについて、また議論するという手法で進められました。最終報告書は、上述のガイドラインとして、2009年、CIOMS/WHOから出版されましたが、この最後には、ガイドライン作成のメンバーのみでなく、コメントを寄せてくれた関係機関、それぞれの名前が収録されています。

ジュネーブはレマン湖に面した国際都市で、WHOの他にも国際連合欧州本部、赤十字国際委員会本部など多数の国際機関がありますが、街全体としては、静かな落ちついたたたずまいをもつ街でした。垂直に一本、天高く舞い上がるレマン湖の噴水、湖畔にあるジャンジャック・ルソーの像、それらが、今では、私の懐かしい思い出です。

●プロフィール

松田 一郎

日本学術会議第19期第七部会員

北海道医療大学学長

熊本大学名誉教授